

戦場ジャーナリストの出発点：岡村昭彦の部落解放運動

神田外語大学 水野孝昭

岡村昭彦が1962年に初めて東南アジアに渡航する前年まで、被差別部落に住み込んで部落解放運動をしていたことは、あまり知られていない。当時の岡村は31歳。東京・下町の皮革工場で働いて被差別部落の人たちと出会ったことがきっかけだった。部落にやってきたヒゲ面の岡村は「ヒゲさん」と呼ばれて、長靴姿で各戸を泊まり歩いた。よそ者扱いをされたこともあったが、子供たちの学習会を作ったり、警察や行政との交渉役になったりしてムラの人々に信頼されていったという。

岡村自身も後年になって、この時の体験がジャーナリストとしての自分の生き方に決定的な影響を与えたことを、強い調子で述べている。

「部落での生活は約一年半にすぎなかったが、私の一生を変え、一生を支えるほどの貴重なことを、私はここで学んだ。皮革工場での苦しい労働と生活を共にしながら、私は観念によってではなく、タンニンの臭気のしみこんだ裸の肉体のぶつかり合いによって、労働者の連帯と解放のエネルギーをつかむことができた。そのおかげで私は、タイでも、ラオスでも、このヴェトナムでも、外の者たちが入っていけない底辺深く入りこみ、かけがえのない友人を発見することができたのだ。」

「私の心は、いま、未解放部落から筑豊へ、筑豊からヴェトナムへ、ヴェトナムから未解放部落へと、血管のように一本に結ばれていることが、はっきりと感じられる」

（「続南ヴェトナム戦争従軍記」 『岡村昭彦集1』 p312）

岡村の心に強烈な印象を残した「部落での生活」とは、どんなものだったのだろうか？

受け入れた部落の人たちは逆に、どのように彼をみていたのだろうか？

どんな経緯でこの部落にやってきて、なぜこの部落を出ていったのだろうか？

これだけ深くかかわった部落問題について、なぜ、その後は取材しなかったのだろうか？

こうした疑問に対して、千葉県人権センターの協力による「語り継ぐ研究会」の聞き取りの一環として、2016年6月12日、その部落を訪ねて、当時の岡村と接した人たちから話を聴く機会を得られた。参加者の一人白石忠男さん（73）には同年8月29日、都内で補足の聞き取りを行った。

（地名や本人の了承を得られた人以外の発言者の名前は匿名にしている。）

○戦場ジャーナリストの草分け

岡村と被差別部落とのかかわりを、私を知るようになったのは、この研究会を主宰する福岡安則・埼玉大学名誉教授らがまとめた報告集を読んだことがきっかけだった。『千葉県A市・B町における同和教育実態調査報告書』である。福岡と黒坂愛衣（現東北学院大学准教授）らが地域の住民を対象に3年がかりで行い、黒坂が執筆を担当した423ページにおよぶ綿密な聞き取りの集大成である。

その中に登場する部落の女性Nさん（聞き取り時で72歳）の話に突然、「モテモテだった岡村昭彦」が出てきたのだ。

報告書のその部分を引用する。《聞き手 F》とあるのは、福岡である。

「《聞き手 F》岡村昭彦さんは、[のちに M 地区の支部長をやった] Yさんとこいたんだっけ？」

《Nさん》 ああ、いたよ。それで、ご飯は、ほら、みんなが……。モテモテだったから、あの人は。

《聞き手 F》 ああ、そう。女性に？

《Nさん》 女性ばかりじゃなくて、年寄りにも。子どもらにも。」

(同報告書 p186)

このくだりを読んで、「なぜ岡村が被差別部落に住んでいたのだろうか？」と驚いた。

それまでは、世界の紛争地を駆け回っていた報道写真家というイメージしかもってなかったからだ。彼の名前を知る多くの人も、事情は同じだろう。

朝日新聞のハノイ特派員を1990年代に務めた私は、岡村と直接会う機会はなかった。ホーチミン市を取材していた時、「戦争中に取材に来た日本人ジャーナリストにベトナム語を教えていた」と語るベトナム人と会ったことがある。「オカムラ」という名前を聴いたが、その時は深く取材することもなく、そのままにしてしまった。今にしてみれば、もっと詳しく聴いておけばよかった、と悔やまれる。

没後30年以上たつが、今もその名前にひかれる人は多い。2014年7月から9月まで、東京都写真美術館で開催された展覧会「岡村昭彦の写真 生きることと死ぬことのすべて」にも、多くの人が足を運んだ。そこでは、彼が1962年に東南アジアに飛んで以降、85年に死去するまでの作品が、網羅的に展示されていた。

展覧会のカタログには、詳細な年譜もつけられている。

足跡をたどると、62年末に渡航してタイやラオスの取材を経て、63年から南ベトナムの戦場を取材。米国のLIFE誌64年6月12日号に、ベトナム戦争の特集レポートを一举掲載。「ロバート・キャパの後を継ぐ戦争写真家」と絶賛された。

日本でも「毎日グラフ」「朝日ジャーナル」「世界」などに戦場のレポートを送り続けて、彼の著書『南ヴェトナム戦争従軍記』（1965年、岩波新書）は、その年のベストセラーとなった。

日本のメディア界への影響は、大きかった。「オカムラに続け」とカメラを手にした若者が次々とベトナムを目指していった。その中から、ピューリッツァー賞を受賞した沢田教一らが生まれていった。

元毎日新聞バンコク特派員だった永井浩は「新聞、テレビの大手各社が本格的な取材に乗り出す前から、ベトナム戦争をつたえる日本人ジャーナリストの活躍ははじまっていた。」と指摘して、岡村を「草分け的存在」と評価している。（『戦争報道論』p471）大手メディアもベトナム報道に力を入れるようになり、「泥と炎のインドシナ」（毎日新聞）や「戦場の村」（朝日新聞）などの長期企画は、大きな反響を呼んだ。こうした一連の報道は、国内のベトナム反戦運動の盛り上がりにより大きな役割を果たした。

その後の岡村の取材は、ベトナム戦争から、米国、ビアフラ、アイルランドなど世界中に広がり、取材テーマも戦争報道から公害・環境問題、バイオエシックス、ホスピスへと変わっていった。「報道写真家」という肩書だけでは、その関心の広がりや旺盛な取材の足跡はとらえきれないようだ。

ただ、彼の中で「血管のように一本に結ばれている思い」は最後まで失っていなかったように思える。

○「岡村さんは恩人」

岡村が住み込んでいたムラは、都内から電車で30分ほどの千葉県下の町の一角にある。千葉県人権センターの鎌田行平常務理事の車で駅前の商店街を抜けると、のどかな田園風景が広がる。曲がりくねった道を入っていくと、こぢんまりとした集会所がある。

この日、集会所の会議室のテーブルを囲んだのは男性4人、女性2人の計6人。年齢は80代から40代までさまざまだ。

真っ先に口を開いたのは、最長老の女性Nさん(85)だった。1931年生まれで、岡村とは2歳しか違わない。ムラの「生き字引」のような存在で、前述の報告集にも聞き取りが収録されていた方である。

「岡村さんは命の恩人だあ、オラあ、ほんとうに本当にお世話になっただよ」と声を絞り出すように切り出すと、一同がうなずいた。小柄で細い体だが、いつも背筋をぴんと伸ばして年齢を感じさせない。

Nさんが岡村を「命の恩人」としているのには、深い理由がある。

当時、極貧の生活を送っていたNさんは、幼い娘のAさん(1957年生まれ)を抱えたまま結核に倒れ、途方に暮れていた。母一人娘一人。地面を掘ったままのムロとよばれるあばら家に岡村が訪ねてきた。病気だというと、「じゃあ、俺が病院に連れていく」といった。療養に何年もかかるし、入院費用もなければ、医療保険にも加入していない。お金の問題以上に、何より娘のことが気がかりだった。

「小さい娘を置いたまま、入院できない」と、Nさんはためらった。

背中を押したのは岡村だった。「別々にするのはかわいそうだけど、子供の面倒を見てくれる人は俺が探すから」と説得した。

入院生活は1年8か月に及んだ。

岡村は、Nさんの入退院の手配はもちろん、退院した後の生活保護の受給、国民年金の免除手続き、さらには娘のAさんの将来の学資の援助に至るまで手配していた。ムラに預けてあった自分の蔵書売り払って、その費用の一部にあてたようだ。

Nさんが退院するとき病院の院長が「娘さんの学校のことは心配しなくていい。子供の支度は全部こちらが持つから」と話してくれた。入院した時に岡村が事情を説明してくれたからだという。当時6歳だったAさんは、その後高校まで進学した。同じ地区にいた同級生7人のうち、高校を卒業したのは一人だけだった。

「私にとっても岡村さんは恩人です」と話すAさんは今春、母と二人で都内のお寺に岡村の墓参りに行ってきた。「立派なお墓でびっくりしました。長年の念願だったので、母と一緒にいけてよかったです」と笑顔をみせた。

Nさんの入院の時に、岡村の将来のジャーナリストとしての一面をうかがわせるエピソードも聞いた。病室に岡村が大きな録音機を背負って面会に来て、マイクを出してNさんにインタビューしたというのだ。「ウソは言っちゃいけない。はっきりと受け答えをして」とだけ注意を与えていた。

Nさんは岡村とのやり取りを、以下のように回想している。

岡村さんが「Nちゃんなあ、いままで生きてきたなかで、なにがいちばん嫌だったか聞かせろ」っ

つうことで、「なんでえ？」つったら、「こういうわけで、〇〇放送[のラジオ]で[放送するんだけど]、ほんの一秒くらいだから、聞かせてくろ」つって。（同報告書 p186）

『シャッター以前 岡村昭彦発見 No.1』の年譜によると、岡村は50年代に「出版流通の仕事や、ラジオドラマを書いたりしていた」と記されている。ラジオ局と何らかの接触があったのかもしれない。

だが、どういういきさつで、岡村がラジオのインタビューを担当したのか。どういう放送番組だったのか。その放送が当時のラジオ番組として実際に流れたのかどうかは、確認できていない。

Nさんによると、岡村はその時「病院（にあるラジオ？）で流すから」と話したそうだが、放送にはならなかったようだ。他の出席者にも確認したが、誰も記憶になかった。

Nさんだけでなく、岡村は部落の少年にも録音を命じていた。当時17歳だった白石忠男さんは岡村から録音機デンスケを渡されて「音をとってこい」といわれた。「いきなり言われて、何をしていいのかわかんなかった」。それでも重いデンスケをかついでいって、いつものたまり場に仲間を集めて、「岡村さんに要請があったら言ってくれ」と呼びかけて、「ムラに排水溝を」「道を直してほしい」「水道があったらいい」といった発言を録音した。だが、それを聴いた岡村は「これは使えない」と一言でボツにしたという。「こういう話がほしいんだって説明してくれればいいんだけど、そういうことしねえっから」と白石さんは苦笑する。

テレビが普及する前のことだ。岡村はラジオ番組でNさんたちの肉声をつたえることで、部落の実態を訴えようと考えていたのかもしれない。

ラジオ局も含めて、岡村は部落の人には見えない、さまざまな人脈や経験を持っていた。海軍将校の家に生まれたが、通っていた学習院で軍事教練に反発して菊のご紋付の木銃をたたき折ったという逸話がある。東京医学専門学校（現在の東京医科大）に進学したが、敗戦後の混乱期に学費値上げに反対して中退。引揚者の支援など様々な経験をしながら、日本共産党に入党したらしい。弟が札幌にいたついで50年に北海道に渡り、山村工作に従事していたこともあったようだ。

白石さんから、「渡辺淳一の『阿寒に果つ』って小説を読みましたか？」と聞かれた。私は未読だったがウェブで調べたところ、作家・渡辺淳一が日本経済新聞に連載した『私の履歴書』の記述があった。『阿寒に果つ』の主人公は、渡辺の札幌時代に交際していた実在の画家の女学生がモデルだが、岡村のガールフレンドでもあったらしい。ウェブを検索すると、以下のような記述があった。

「51年の初冬、岡村は道東の辺鄙な村に移り住む。同年10月、日本共産党の第5回全国協議会（五全協）の決定に従った行動だった。中国の毛沢東戦略に習い、共産党は五全協決定で、山村工作隊という農村部への非公然の武装宣伝隊を組織し、党の拠点作りを始める一方、都市では過激な火炎瓶闘争を展開した。岡村は、その一員として参加したのだ。そして道東のある村の診療所で、無資格医療行為を行ったかどで警察に逮捕される。」

その後、岡村は函館の修道院暮らしや短い結婚生活と破局を経て、東京に出てくる。

上記の年譜によると「昭和34年頃、部落解放同盟に入り、オルグ活動を始める」とある。

「オルグ活動」といっても、鎌田さんによると「組織の一員というより、一匹狼のように活動していた」と話す。解放同盟の地域支部が設立されたのは、岡村が部落を去ったずっと後の1974年のことだ。

部落解放同盟は、岡村を「状況に風穴を開け、解放運動の兆しを作った」と評価している。

「岡村さんは行政に働きかけ、生活改善に取り組んだり、子供たちの教育に力を入れます。また、差別事件の糾弾にも取り組みました。」

「岡村さんの活躍により、町では1960年代に、同和対策審議会が設置されます。」

（『部落解放20年の歩み』p14）

町の同和対策課の記録にも、「昭和36年（1961年）に同和対策審議会を設置し、町役場の福祉課（当時）の一部にその係（兼務）を置き、当面の同和行政及び同和対策事業の推進にあたってきた」とある。

岡村が町と交渉を重ねていった結果、町も重い腰を上げて窓口を設置せざるを得なくなったのだろう。もちろん「審議会」という組織を作ったからといって、実際の対策が充実したわけではない。ムラの生活の改善につながる実際の同和対策事業が始まったのは、74年に同盟の支部が結成されて以後のことだった。ただ岡村が人々と運動をつづけたことが行政を動かしたことは間違いないだろう。

岡村の卓越した交渉の手腕は、今も人々に鮮明な印象を残している。解放同盟による交渉と言えば、集団で押しかける激しい「糾弾」を思い浮かべる人も多いかもしれない。だが、岡村は交渉をいつも一人でしていたようだ。交渉している姿を記憶している人はいないし、「誰かと一緒に役所に行くって話は聞いていない」という。

部落で起きた「冤罪事件」で、自転車の盗難事件をめぐって差別意識を丸出しにしてムラの青年に見込み捜査を進めた地元の警察署を追及。ついに県警本部に謝罪させたことは、人々に鮮明な印象を残した。県警本部長がムラの青年の家に出向いて謝罪した時、白石さんも野次馬でその様子を見ていた。

「びっくりこいた。あんな偉い人が頭を下げるなんて考えてもみなかった。いつもはこっちが頭を下げる立場なのが、逆転しちゃった」（白石さん）

ただ、弁護士でもない一介の若者が、どうやって千葉県警と渡り合うことができたのだろうか。これも考えてみると不思議だった。

鎌田さんによると、岡村は戦後最大の労働争議といわれた三井・三池闘争を通じて「部落解放の父」と呼ばれた松本治一郎と懇意になっていたらしい。社会党の重鎮で、参議院副議長も務めた大物政治家である。「私淑してたっていうか、個人秘書のような仕事もしていたようだ」という。

上京してからも松本との関係は続いており、警察や行政との交渉の際に松本の政治力を利用したこともあったとみられる。鎌田さんが当時の住民から聞いたところによると、「ムラでひとつしかなかった赤電話から、岡村さんが『松本先生をお願いします』って何回も電話していた」という。

この証言で、ひとつ謎が解けた気がした。

ただカリスマ的な弁舌と知識をもちあわせていた岡村自身が主役であったことは言うまでもない。

「行政に勝つには相手よりも知っていないと説得できないって。相手よりも倍のことを知っていないといけないって」。こう繰り返していたのを、当時ムラの少年だった K さん（66）は覚えている。

○「親分」との出会い

岡村と出会って以来、その人柄に感化されて「親分」と慕っていたのが、白石忠男さんだ。ムラで最も深く、長く付き合った、と自他ともに認める。部落にきて最初の一か月くらいの間、岡村は白石さんの家に泊まり込んでいて、夜は一緒の布団で寝ていたという。「毎日いろんな家に行ったけど、よそ者扱いされて皮肉を言われたって。毎晩、愚痴をこぼしていた」と話した。

最初に会ったときは、頬がこけて、あご髭がぼうぼうのヒゲ面。ムラでは「ヒゲさん」と呼ばれていた。長いオーバーに長靴姿という異様ないでたちで歩き回っていたので、ムラでひととき目立ったという。荒川の皮革工場で働いていた岡村は、その工場で働く部落の人たちと知り合いになった。その一人、I S さんから「お前は頭が良さそうだから、部落に来て子供たちに勉強を教えてやってくれ」と頼まれて、部落に住み込むようになった、という。

じつは、前出の報告書をまとめた福岡は、解放同盟の支部が結成されてまもない1976年にもこの部落で聞き取り調査を行っている。そのときの聞き取りの音声おこしを今回、提供してもらうことができた。

そこでI S さんは、当時の皮革工場での労働について語っている。過酷な労働で体を壊して退職したばかりだった。

「ちょうど六か月ばかり医者に通っているんですよ。だから、いまはほとんど仕事しねえ。暮れまでは、皮革やってたんです。東京まで通ってたです。ここから。そこの工場はクロムセって言って、革を青い色に染めて、それをだんだん赤とかいろんな色に染め上げていくですよ。その工場は15年くらいいました。」

「小さな工場はみじめなもんだ。男は三人しかいねえ工場で、だから、おれ、そこ五年ばかりやった時に、とっかえべえかと思ったけれど、いやいや、いまこの年して、そちらこちら歩いたってしょうがない。もうちょっとやって隠居するんだと思ったから、どうどうそれで一五年やっちゃった。」

I S さんが言及している「クロムセ」とは、猛毒の六価クロムをつかって皮をなめす工程を指していると思われる。（発がん性も高い六価クロムによる工場労働者の健康被害や土壌汚染は70年代になって大きな公害問題として注目された。）岡村が「タンニンの臭気のしみこんだ裸の肉体のぶつかり合い」と書いたように、被差別部落の人と出会ったのは、こうした「小さな工場」の労働現場だった。

岡村はムラに来て最初のうちは毎晩それぞれの家を泊まり歩いて話し込んで、各家庭のいろいろな事情を聴いていった。貧困のどん底だった生活を変えるため、子供の教育にひととき情熱を注いだようだ。関係のあった日本社会事業大学の学生たちを連れてきて、白山神社で「学習会」を開いて子供たちを集めた。

学習会といっても学校の授業の補習だけでなく、独自のカリキュラムもあったようだ。中学生だった白石さんが夏休みの自由研究に与えられたテーマは、「土地持ちと土地借り」。部落の家を一軒、一軒歩

いて、田圃や畑の持ち分について聞いて回ったという。子供たちにも社会の矛盾を教えようとおもったのだろうか、

のちに彼は、「資料というのは権力側が持っているものだから、それを上回るだけのことをやる。……そしてそのカリキュラムは自分でつくろう。それが僕の生き方さ」と語っている。(NHK教育テレビ『訪問インタビュー 岡村昭彦』1984年9月17日放映)

彼のそうした生き方が、報道写真家として活躍する前から、部落の人々や子供たちとの触れ合いの中ですでに実践されていたことがよくわかる。

毎朝、部落の子供たちを整列されて学校まで送っていた姿についても、福岡の聞き取り(1976年)で地域の指導者だったTSさんが語っている。

「終戦後、岡村昭彦君がきてた昭和三六年ごろでも、まだ長欠児童が二〇名ちょっと越していたんですよ。岡村君は、朝、ぜんぶ並ばして学校へ送っていく。すると、行ったのがもうすぐ何名が逃げ帰ってきたりということがあったわけです。

昔は、まあ学校行くんでも、一年つうじてぜんぶ学校へ行ったという子はいないです。多かれ少なかれみんな休んでた。やっとな昭和三六年から40年ごろにかけて、中学校へやらなきゃいけないんかって、やりはじめたんですけどね。

上の学校にやるんだという意識になってきたのは、このごろですよ。高等学校に行くように、親たちがやらなきゃいけないんだということでやりはじめたのは、五、六年がとこですね。それまではそれほど学校を重要視しなかったですね。それよりは食う足しにするんだというほうが強かったですね。」

学校に行ってもいじめられる部落の子供たちは、通学しても脱走して岡村の手を焼かせたらしい。

学校にいったふりをして「山学校」と称してそのまま野山で一日遊んで過ごして、下校時間になると素知らぬ顔でムラに帰ってきていたという。学校給食がなかった当時、弁当をもっていけなかったり、貧相な弁当の中身をからかわれたりして、長期欠席(今でいう登校拒否)になっていく子が多かったという。

学校になじめない子供のために岡村が始めた学習会は「たんぼぼ子供会」と名付けられ、その後も長く続いた。Kさん(66)は「たんぼぼ子供会」に小学校5年生から高校時代まで通って、中退者が多い部落の中で「学校は出なければいけないものだ」という意識をもつようになった。子供会の楽しい思い出は数多い。「先生役」の社会事業大学の学生に沖縄出身の人がいて、フェリーに乗って彼の実家を訪ねていったこともあるという。沖縄返還運動の真っ盛りのころだった。

同じ「子供会」でも、7歳下のAさんの世代になると、内容が変わっていったらしい。「高校進学を目指す子供は行かなかった。遊びの会みたいになっていたから」と話す。だが、岡村が始めた子供会の活動は高校進学率の向上という成果を残し、部落の姿を変えていくのに貢献したといえるだろう。

白石さんの話に戻ろう。

岡村に出会うまでは、白石さんはヤクザにあこがれていた。部落出身の知人が組員となって「背中に入

れ墨入れてかっこよくなって、いつも綺麗な女の子を連れていたから、ヤクザになりたくてしょうがなかった。岡村さんと会わなかったら、たぶん……」と苦笑する。

「読書するようになったのも岡村さんのおかげ」という。中卒後、ネジ工場などの仕事をしていて白石さんを、岡村が呼び出して都内の広告印刷会社に就職を世話してくれた。新聞広告の写真製版が仕事だったので、朝日、毎日、読売など全国紙の朝刊と夕刊の広告を連日こまかく点検するうちに、いつしか記事にも目を通す習慣がついた。

ほかの仲間も寿司屋の丁稚など、岡村に就職の面倒をみてもらっている。

「親分はなんで俺をここに就職させたんだろうって思ったけど、おかげで活字が好きになりました」

岡村が部落を出た後、二人はいったん行き来が途絶えたが、白石さんの立ち読みがきっかけで再会した。

六本木の書店で手にした雑誌「PHP インターナショナル」に岡村の写真ルポが掲載されていた。編集部で連絡先を訪ねたら、静岡県の舞阪町の岡村の実家の電話番号を教えてくれた。

電話をかけると、本人が出た。

「白石です」。緊張気味に切り出すと「誰だ、お前は？」とぶっきらぼうな返事だった。

「タダオだよ」と名前を繰り返すと、「なあんだ、お前かあ」と懐かしそうな声に変わった。

PHPの編集部があった六本木で再会したら、「えらいご機嫌で、今度は舞阪へあそびに来いって」。白石さんに新幹線の自由席切符二枚を渡して、「講談社から（切符を）せしめてきたんだ」と自慢気だったという。

この再会をきっかけに、二人は昔のように親密な行き来をする仲になった。

岡村にとっても、白石さんは心を許せる特別の存在だったのだろう。

都内で遅くなったり、海外に出かけたりするたびに、千葉県下にある白石さんのアパートに泊まった。家族5人が暮らす洗濯物だらけのアパートに、自分の布団と寝間着を送り付けて、いつでも泊まれるようにしていた。終電で転がり込んでくる岡村のために、白石家も岡村の好きなエビスビールをケースで用意していた。海外に行くときは、白石さんがトラックを運転して成田空港まで送っていくのが習慣だった。「ほかに泊まれる広いところはいくらでもあるのに、何でうちに来るのかと思った。やっぱり安心できるところがほしかったのですかね」と話す。

○カメラを質屋に

一同が爆笑したのは、白石さんが岡村氏の最初のカメラについての挿話を明かした時だ。

「羽田に皆で見送りに行った。ベトナムに行くとき。そのとき、岡村さんのカメラをうちの母が質屋にいれちゃった（笑）。バカチョン。俺が岡村さんから『持っててくれ』といわれて預かっていたカメラが、家がない。『(カメラは) どうしたの?』っていったら、母親は『ちょっと・・・』っていうんだ」

結局、岡村は手持ちのカメラを持たないまま、羽田を飛び立っていったという。

岡村が62年に初めて海外に行く前に、すでにカメラをもっていたという話は、意外だった。

『新週刊』編集部ではグラビア担当だったが、土門拳らプロのカメラマンが写真を担当して、岡村は文章を担当していた。（岡村自身がNHK教育テレビの『訪問インタビュー』で語ったところでは、「僕は

レイアウトを知っている。だからトリミングして土門さんの写真でも、自分で勝手に切っちゃう。土門さんが怒ってねえ。でも、かわいがってもらった。そんなことやる人はほかにいないから」と笑っている。）

一般には、以下のようにバンコクへ赴任する途中に香港でライカを購入したエピソードが広く伝えられていて、カメラの使い方も知らないでカメラマンになったという「岡村伝説」の一つになっている。

「岡村昭彦が PANA 通信と契約してバンコクに向かったとき、彼は写真についてはまったくの素人で、カメラをいじったこともなかったというのが定説になっている。彼はバンコク支局に向かう途中、香港に立ち寄り、ライカ M3 型を買ったが、フィルムの詰め方がわからなかったので、同僚に尋ねたという。それでも、彼は平然とこういうのだ。『確かにフィルムの詰め方は知りませんでした。何にレンズを向けるべきかは知っていました。だから、私はプロでした』」（『「將軍」と呼ばれた男』、玉木明著 p46）

白石さんの話は、この「伝説」の見直しを迫るのかもしれない。

鎌田さんは、この「バカチョン」について「アサヒペンタックスですよ」と指摘していた。ロングセラーになった国産小型カメラ「アサヒペンタックス」シリーズは 1950 年代末に生産が始まっている。

ただ、白石さんは「一眼レフではなくて小さいやつ」と話しており、細かい記憶は定かでない。

ただ、初の海外赴任を前に岡村がカメラ一つ用意していなかったとは考えにくいのではないだろうか。出発前に白石さんに預けていたが、事情をしらない白石さんの母親が質屋に入れてしまっていて、岡村氏はカメラを持たないまま出発していったのかもしれない。

では、岡村氏はこの「幻のカメラ」を使って、出発前になにか写真を撮っていたのだろうか？

それとも新品のまま白石さんに預けていて、一枚も撮らなかったのだろうか？

カメラを購入したなら、ふつうは試しで 2, 3 枚くらいはシャッターを切っていただろうと推測したくなる。残念ながら、確認するすべはない。白石さんも、質に入れたカメラにネガが入っていたかどうかまでは、記憶にない。

写真について、もう一つ不思議なエピソードを聞いた。兄弟のように親しかった岡村氏と白石さんだが、二人で一緒に撮った写真は一枚もないのだ。部落に住み込んでいた時も、その後も一緒に写真を撮ったことはない。

「そう言われてみれば……ないですねえ、一枚も」と白石さんも驚いていた。

「うちに来た時に『たまには一緒に写真撮りますか』と話しかけたが、『バカ、お前と一緒に撮ってどうすんだ』とあっさり断られた」という。

その後も、白石さんはアイルランドに移り住んだ岡村家のもとへ小学 5 年生だった長女を留学させた。岡村も英語しかしゃべれない同い年の娘を、白石家に預けた。

家族ぐるみで付き合っていた二人だが、一緒に写った写真はないというのだ。

○トラブルの真相？

岡村の足跡をめぐるパズルのうち、最大の疑問は、なぜ一年以上も住み着いて住民の信頼も築いたところで唐突に部落を出ることになったのか、ということだ。この疑問についても、貴重な証言が聞けた。

ひとつは、養豚事業をめぐるトラブルに巻き込まれたという話だ。

岡村の呼びかけで、ムラの一角に豚小屋ができて、2、3匹の子豚の飼育が始まった。各戸から出る残飯を利用して、部落の人が交代で世話をするような共同事業だったらしい。「ブタを飼えばもうかる」という話が広がり、部落で一時的な養豚ブームが起きたようだ。

Kさんの記憶では、材木屋の父から木の切れ端をもらってマキにして、ブタのえさとなる残飯を釜で煮込んでいたという。

だが、成長したブタを売却するときになって、その売買代金をめぐって部落の中でトラブルが起きた。「ブタを売った銭を貸したら、返ってこなかったんだよ」とNさんは振り返る。

「その泥を、岡村さんが全部かぶったんだ」と白石さんは証言した。

戦前の名家の出身で、「戦後も闇ドルの両替で大儲けした」（白石さん）という岡村が、部落の共同事業の売上金に手をつけたはずはないだろう。ムラでの活動のために、預けていた自分の蔵書を売りさばいて手持ちの資金を作っていた、という証言もある。

新参のよそ者が、瞬く間に村でリーダー格となっていくことに、一部のムラ人は反発したようだ。子供たちの教育から排水構の建設、養豚と次々に新しい取り組みを始めて、人々を巻き込んでいく若き活動家。世話になった人からは「英雄だ」と尊敬されていたが、ムラの秩序を乱して既得権益に手をつけられることに「うまいところを取られる」と反発したグループもいたらしい。

トラブルについては、別のエピソードもある。

部落の若者がかかわったとされる婦女暴行事件があり、週刊誌に部落の様子が差別表現まじりで大々的に報じられたことがあった。ムラの内情について細かく書かれていたため、「岡村が（週刊誌に）チクったのではないか」という疑惑が広がり、岡村は週刊誌の記者とともに呼び出されて激しいつるし上げをくったという。

岡村が本当にその記事にかかわっていたのかどうかは、確かめるすべはない。幻のラジオ番組の件を考えれば、メディアの力を知っていた岡村が週刊誌と何らかの接触をしていても不思議ではないと思える。

どんな経緯があったにせよ、差別や偏見を強めるようなセンセーショナルな記事は、彼にとって本意ではなかったはずだ。それがムラの人々の気持ちを傷つけたとして大問題になったことで、さぞかし岡村はつらい思いを抱いたことだろう。

そんな折に、労働組合の全国組織・総評（日本労働組合総評議会）が1961年5月に創刊した週刊誌『新週刊』の編集部から、岡村に声がかかった。その経緯について同誌の編集長だった加藤子明が書いている。

「そこ（この部落）で、アゴヒゲをはやした大男のオルグ、岡村君を知ったのです。ぼくは彼の仕事をみて、すっかりほれこんだ。強引に連れてきて、『新週刊』の編集部員にしました」

（『南ヴェトナム戦争従軍記・岡村昭彦集1』 p498）

岡村は61年夏ごろから『新週刊』編集部勤め始める。グラビアや「地底に生きる日本人」などの特集を担当したが、その仕事を通じて、筑豊の上野英信などジャーナリストや写真家たちと出会う。

上野英信は、岡村との出会いをこう回想している。

「初めて出会った当時、彼は総評の発行する『新週刊』のグラビア・ディレクターとして働いていたが、後年のたくましい風貌からは想像もできないほど、痩せて蒼い顔をした、見るからに神経質な感じの青年であった。まるで覆面をしたような黒い長いひげで包んだ顔に、眼だけが異様にきらきら輝いていた。」(p 476)

岡村は上野の案内で「飢餓の嵐の吹きすさぶ筑豊炭田の小ヤマを歩きまわ」り、何度もルポルタージュを依頼した。これをきっかけに、岡村は上野英信を深く慕うようになった。

ベトナム戦争の取材を真剣に考え始めたのは、この時期のことらしい。上野は、当時の岡村が「会うたびに熱っぽい口調で南ベトナム行き計画を語った。そして、私にも同行を勧めた」と回想している。

『新週刊』が廃刊となったため、62年9月頃にPANA通信(Pan-Asia Newspaper Alliance)の契約特派員に転職し、同年末に初の海外取材でバンコクへ飛ぶ。これ以降、岡村は南ヴェトナムの戦場を駆け回り、「報道写真家」としての声価を確立することになる。

白石さんは東京・有楽町の朝日新聞東京本社ビルにあったPANA通信の事務所にも、岡村に連れていかれたことがある。「コートに長靴姿でヒゲ面、エレベーターで上がったのこのこ入って。すげえところに入っていきやがなって」。勤務先が東京に変わっても、岡村は部落在住のころと同じ風貌で闊歩していたようだ。

○姿を消した岡村

岡村が部落を出ていったときの姿を覚えている人は、参加者にはいなかった。Nさんは結核で入院中だった。白石さんも「岡村さんはいつ出てったのか、わかんなかった」と言う。「追放されたんだ」というショッキングな言葉を使った人もいた。

Nさんの娘で当時4歳だったAさんは「母が入院してすぐになくなったじゃないですか。ムラでの最後の仕事として母を入院させてくれたのではないだろうか」と推測する。

その後も、ムラと没交渉になったわけではない。

ベトナムに行った後も、部落の何人かの知人に署名入りの自分の写真やハガキなどを送ることもあったという。岡村も南ベトナムやカンボジアの取材に駆け回っていた1964年1月に、「たどたどしい字のK少女からの手紙」をバンコクで受け取ったことを書いている。

「——《村もすっかりかわりました。下水の掃除にもみな協力するようになり、社会事業大学の学生さんたちも、土曜日にはかならず来てお宮に泊まり、子供たちに勉強を教えています。みんな岡村さんがどうしているか、丈夫でいるか心配しています。戦争に行っていると聞きましたが、バンコクの住所しか知らないで、そこに手紙を書きます。とても上手に字が書けるようになったでしょう。部落解放のために一生懸命にやった虎じいさんは、このあいだ脳溢血で死にました。岡村さんからの手紙をととても大切にしていましたよ。いつごろ日本に帰りますか。村のものがみんなでお祝いしようと張り切

っています。 K子より》」

「わたしは未解放部落という、いまも差別にあえぐ人たちとともに、一年半ほど過ごしたことがある。その村の人たちは、わたくしにとって、人間の美しさを教えてくれたよき友であり、子供たちは妹や弟と同じである。わたしがはじめて羽田を発って東南アジアへ飛び立つとき、村のお餞別をもった青年が送りに来てくれた。この青年たちが、わたしの唯一の見送り人であった。」

(「南ヴェトナム戦争従軍記」 『岡村昭彦集 1』 P119)

その後も、戦場取材の合間に文通は続いていたらしい。1965年に南ベトナムのサイゴンから解放区「Dゾーン」に命がけの取材に行く前夜も、筑豊の上野英信やムラの友人あてた手紙を、同僚に託す場面を描いている。

「《Dゾーン出発直前の岡村特派員》という写真をとりたいという彼の求めに応じて、私は壁に張った大きな軍用地図の前にたち、明日は入るだろう“Dゾーン”を指さした。もし私が死んだときには、この写真をあくまでPANA通信社から世界に流させるのだ、とってC支局長は笑った。彼はもうほかに自分にできることはないかとたずねた。私は日本の筑豊の廃鉱に住んでいる友人あての電報と、東京近郊の未解放部落の友人あての手紙をもっていた。C支局長は「それは自分が電報局へもっていこう。もうきみは部屋からでないほうがいいよ」といつてくれた。私はもう一度ローマ字の電文を確かめて、彼に託した」

(「続南ヴェトナム戦争従軍記」 『岡村昭彦集 1』 p311)

友人たちとは強いつながりを持っていた岡村だが、その後は表立って「里帰り」した形跡はない。部落を出た時の経緯について、彼の心にしこりや後悔が残っていたのだろうか。

ただムラの人たちに内緒で、ふらりと訪ねたことはあった。

白石さんによると、成田空港から出発する岡村を市川の自宅からトラックで送っていく際に、「ムラ見てみる?」「行ってみるか」という話になり、2度ほど部落に立ち寄ったことがある。誰を訪ねるわけでもなく、新しく建った家などを見せながらぐるっと回っただけだった。

Kさんも一回、夜に暗くなってから岡村とムラを回った記憶があるという。「昼間、堂々と歩いていくような形ではなかった」

「訪ねるならキチンと行かないとな。今はいかれない」と、岡村は話していたという。

彼なりにスジを通してから訪ねよう、と思っていたのではないかと白石さんは推測している。

○「岡村街道」

集会所での語りの後、岡村が先頭にたって工事をしたという駅へ向かう道、「岡村街道」に向かった。線路が伸びる小さな駅の裏手には、丘を切り開いた高台の宅地が開発されている。宅地は売れ残っているようで、整然とした区画には雑草が生えている。

その駅から高台の竹林を囲むように狭い坂道が、地域の神社に向けて続いている。

ムラから都内に通う通勤・通学路だった道だが、当時は舗装もされていない湿地で、雨が降ると水たまりだらけで人々は難儀していた。

「夜は明かりもないし、よくこんなところを歩けるなって思った」と当時の作業に参加した白石さん。その状態を見た岡村は、石炭ガラを集めて道に敷き詰めて水はけを良くする工事を始めた。人々も作業を手伝って、雨が降っても足が濡れないようになったという。その功績をたたえて、当時はムラで「岡村街道」と呼んでいたという。

その道を歩いてみた。駅裏からゆるやかな登りで、今は道のわきに家が建っているのが当時の様子を想像するのは難しい。ただ途中に、高台側から流れてくる水によって道が濡れているところがあった。

「昔はこんな感じだったんだな」と鎌田さんは指さした。

鎌田さんが70年代半ばに部落に来たころ、コンクリートのU字構が山積みになっているのを見た。岡村が始めた仕事を受け継ぐように、排水溝の工事がムラの中で進んでいたのだ。

◇ ◇ ◇

岡村の一周忌に、部落で偲ぶ会を行った。白石さんたちが解放同盟の支部長に頼んで開いてもらった、事実上の「支部葬」だった。その後も白石さんはムラの近くにある人権センターや、自分の仕事場のある葛飾区で、岡村の写真展を開いた。99年4月に葛飾区立石かつしかシンフォニーヒルズで開かれた写真展「21世紀への遺言／戦争・愛・生命の尊厳」は、NHKの首都圏ニュースでも報道され、多数の来訪者でにぎわったという。

白石さんは言った。

「親分がムラにいたことは聞いていても、何をやっていたのか知らない人が多いんです」

「展示した写真が多過ぎるって言われたけど、親分の気持ちを考えたら、できるだけたくさん見せてあげたいって思ったんですよ」

【参考文献】

『南ヴェトナム戦争従軍記 岡村昭彦集1』（1986年 筑摩書房）

『シャッター以前 岡村昭彦発見』（岡村昭彦の会＝編集・発行 1990年、95年、2005年）

『「将軍」と呼ばれた男』（玉木明 1999年 洋泉社）

『戦争報道論』（永井浩 2014年 明石書房）

『岡村昭彦と死の思想』（高草木光一 2016年 岩波書店）

『千葉県 A市・B町における同和教育実態調査報告書』（A市人権教育推進のための調査研究委員会 2006年）

『部落解放20年の歩み』（部落解放同盟千葉県連合会 1994年）